



写真 教育討論会風景 (平成17年5月29日 金沢市教育プラザ富樫)

題字・デザイン 吉田貞介氏

石川県教育工学研究会

2005.8.20

第69号

## 授業づくりは楽し

前石川県教育工学研究会副会長・前金沢市立安原小学校校長 押野市男

人は「作る」「造る」という意識がポジティブな感情で仕事に向かわせ、自己の精進・進歩をはかっていくのではないのでしょうか。私たちにとっての至上命題の一つは、「授業づくり」です。授業づくりを2方向から次のようにアプローチされたらいかがでしょうか。1つは、「資質づくり」であり、もう1つは「自分のつくりたい授業づくり」です。

### 1. 自己の「授業の資質づくり」を進める。

先輩に、教育観や教育方法・技術を多岐にわたってインタビューし、自身の考え、やり方をふり返る方法です。皆さんにはすばらしいと思っている先生がおいですることでしょう。その先生に夏、思いつくまま素晴らしい点をお伺いするのは。その後、その項目について自身の考えややり方と対比し、改める点を書き出すわけです。もう1つ、自信の授業をビデオに撮り、4～5人の方に見てもらい気づいたことを1枚1項目で書いていただく。そのカードをご自身で分類し、授業力向上の方向・方途を得る。

### 2. 「自分のつくりたい授業づくり」に取り組む

私たちの職業は、自身が描いた授業に自分自身で取り組めるという素敵な職業です。私は、これまで次のような授業づくりに取り組みまめました。

- ・イラスト・イメージ表現を効果的に行う授業づくり
- ・調べる意欲を高める学習過程の構成 ～児童の模倣一工夫・探求活動を保障する学習過程の構成～
- ・観点別評価を踏まえた授業設計の手順 ～能力育成の面からのアプローチ～
- ・地域に素材を求める年間計画 ～地域のあるがままの自然を生かして総合化を意図した学習～
- ・学校ぐるみで取り組む総合学習番組の活用  
以上を見られると、教科、単元、領域、年間、学校といった具合にバラエティーに富んでいることに気づかれることでしょう。

自分の授業づくりの課題を自身が把握し、目指す授業像を追い求める姿は、自己充実感生んでいく。そして、児童・生徒にも返っていくと考えます。益々の精進を期待します。





## 学びを深める地域貢献型の学習

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※ 輪島市立鳳至小学校 長 井 真 吾 ※※※

### 1. はじめに

輪島市には有名な「輪島塗」があり、社会科で学習する。子ども達は地域に学ぶが、それに終止してしまい地域に返すまでに至っていない。

子ども達に知識・理解にとどまらず、地域の一員として自分達で出来ることを考え実践して欲しいと考えた。そこで、子ども達が輪島塗の製品案を考え、輪島塗従事者に伝える活動を設定した。実践を通し、子ども達の学びがどのように深まったかを考察してみた。

### 2. 研究の目的

地域に貢献する学習が、「学び」の深まりに有効かを明らかにする。

### 3. 研究の方法

- (1) 地域に貢献する実践を文献から考察し、子ども達にどのような力がついたか、また、成功するためのポイントを探る。
- (2) 地域貢献型の授業を行い、子ども達の学びがどう深まったかを考察する。

### 4. 文献から読み取れる学びの深まり

#### (1) 子ども達について

表現力（分かりやすく、説得力があるようにと工夫するため。）

思考力（学んだことが正確か、相手を納得させるに値する内容かを吟味するため。）

自信（社会に認めてもらい、地域の一員として貢献できたという思いから。）

### 5. 実践の内容

#### 4学年 社会科 わたしたちの県の様子

地元の伝統産業「輪島塗」の授業を行い、その後発展学習として総合的な学習の時間を使い自分達でオリジナルの輪島塗の製品案を考え、輪島塗従事者にプレゼンテーションを行った。

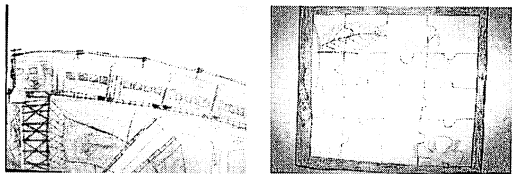
#### (1) Unit 1 「輪島塗を知ろう」

社会科の基礎・基本を押さえることを目標に授業を行った。ここでの充実が次のプレゼンテーションの意欲に繋がるので、子ども達が輪島塗について興味・関心を持つように、クイズやビ

デオ視聴、PC利用、工房見学等を取り入れた。

#### (2) Unit 2 「自分達が考えたオリジナルの製品を輪島塗従事者に伝えよう」

子ども達が考えた輪島塗の製品案を画用紙に描き、一人1分間の持ち時間で製品のウリを盛り込み、従事者相手にプレゼンテーションを行った。



### 6. まとめ

今回の実践より以下のことが明らかになった。

- (1) 発表内容を丁寧に吟味し、学習したこと（輪島塗の特長、漆の特性）を振り返ることによって、漠然とした部分がより明確になった。
- (2) 相手によく伝わるようにと表現の仕方（話し方、イラスト等）の工夫がみられた。
- (3) 輪島塗従事者に認められたこと、自分達でも地域に貢献できたという自信に繋がった。
- (4) 子ども達だけでなく、漆器関係者も子ども達のアイデアや頑張り刺激されるという双方向の効果がみられた。

### 7. 課 題

- (1) 授業時数が限られており、Unit 2で子ども達の多様な意見を生かせなかった。現場に戻ったら、ホームページ作りや交流学習など、取り入れてみたい。
- (2) 「地域に対し自分達でできることを実践する」活動内容が、発達段階的にどの学年が適当であるかが疑問である。
- (3) 本当に子ども達がやりたい内容だったのか、教師の思いが強すぎなかったかという疑問が残った。







# 石川県教育工学研究会 金沢支部活動

金沢市立浅野川小学校 細川 都司恵

## 1. 支部の活動

金沢地区のコンピュータ整備は、昨年で完了し、次期の整備を迎えようとしています。情報教育に対する関心も年々高まり、それぞれの学校で実践が広がっています。

支部としましても、今年は、これまでの実践を蓄積し、生かす方法はないかと考えました。

そこで、今年は、金沢市および近隣の学校にPCサポーターとして入り活躍されている方々と協力して、情報基礎スキルやITを教科に生かした授業事例を統一したA4用紙1枚程度のフォーマットで作成し、これまでの実践の集約に取り組んでいます。近いうちに何とかウェブに公開する予定もあります。

こういった事例の集約は、いろいろな機関や団体で多く取り組まれていることですが、

- ① 市に整備された情報機器に合わせた事例
- ② 指導や支援のワンポイントアドバイス
- ③ ワークシートやコンテンツ等の資料付き
- ④ 調べる・まとめる・伝えるに特化した事例が特徴です。

このことから、情報の授業をする時、または、教科にITを生かして授業したい時、学習過程

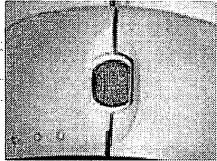

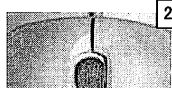
として増えつつある「調べる・まとめる・伝える」の場面に応じて、金沢市の実態に合った事例を取り出し、それを参考に授業実践することで、子どもたちのスキルアップが容易となります。

現場の先生が使いたくなる事例を多く集め、活用していただき、金沢の情報教育の進展に少しでも寄与できればと考えております。

なにぶんにもメンバーが不足しております。多くの先生方の実践が集約できればいっそう使い勝手が上がると考えております。関心の高い先生方に、事例の提供をいただけるとありがたいです。

## 2. 実践交流会

1年に2回開催するうち、金沢支部が主催するのは第3回の実践交流会です。去年は、長田町小学校を会場に行いましたが、長田町小の先生方のご協力も得て盛会となりました。今年度は、予定として平成18年1月下旬の土曜日を考えております。例年通り、5分プレゼンによる授業実践報告を行います。講師など詳細はまだ未定です。近いうちにチラシ等でお知らせしますので、ぜひご参加ください。

		<b>活動名 デジカメ3 (スリ) - ヒントクイズをつくろう</b>	
		■活用場面: まとめる ■対象学年: 低学年 ■スキル: デジタルカメラの操作 ■使用ソフト・機器: プロジェクター・デジカメと接続するコード	
		<b>◆本時のねらい</b>	
<b>◆事前準備と授業の流れ</b>		・デジタルカメラの使い方(写し方・姿勢・マクロの使い方・再生)を知る ・同じ被写体を写し方を変えて撮り、クイズをつくることを楽しむ	
活動の流れ	時間	活動内容	支援のポイント
事前準備①	前日まで		・電池の充電をしておく ・カメラを2~4人に1台程度になるよう準備する ・メディアカードを準備する ・見本の3ヒントクイズを作っておく
事前準備②	開始直前		
		○デジカメ3ヒントクイズを見る。 ・デジタルカメラを使ったクイズのしかたを知る。 ○カメラの使い方を知る。 ・電源の入れ方。 ・カメラマークで写す。	・教師のつくったクイズを見せて興味付けする。  



## 石川県教育工学研究会 白山支部活動

白山市立東明小学校 中條 敏江

### 1. 今年度の方針

松任石川支部は5年目を迎え、合併に伴って、白山支部とした。

#### 白山支部2005年方針

- ① 授業研究をしよう（自分に）
- ② 校内研修を工夫しよう（学校に）
- ③ まわりに積極的に提案しよう  
（外にむけて）
- ④ 仲間で学習しよう（中に向けて）

今年度の方針は上記であり、広域異動もあり、支部部員が金沢に多数異動しても、そのまま活動を続けていた。1月より毎月始めた学習会も、「いちご読書」を中心に盛り上がり、よい学習の場となっている。そこで今年度は、これまでの支部部員だけでなく、広く他支部にも声をかけることとし、白山支部を中心として開催するが、研究部全体の取り組みとした。

また、学習会で紹介された他校の取り組みが、それぞれの学校で行われることも少なくない。

### 2. 学習会例会

- ◆日時 毎月第4木曜日
- ◆場所 東明小学校 あるいは 額小学校
- ◆内容

#### <いちごミニ読書>

持ち寄った未読の図書を持ち寄る

15分 読解 2分まとめ

一人ずつ

3分 読み取ったことを伝える

2分 質疑

アウトプットがあるので、15分は真剣に読むだけでなく、読んだことを伝える構成の工夫も求められるため、参加者は、互いに緊張感があふれる。また、自分の読んだ図書以外の情報も得られる。

#### <それぞれの取り組み>

取り組んでいること 悩んでいること  
プレゼン検討など

月一度の例会が、部員の楽しみとなり慣例となってきた。今後とも、自分たちの学習の場として位置づけて、丁寧に行っていきたい。

### 3. 夏の実践交流会及び学習会

今年度の実践交流会は例年通り3回行われ、夏に白山支部、秋に七尾支部・本部で、冬は金沢支部で行われる。

夏には、金沢大学実践総合センターと共催で、県外からの講師を招いての学習会を兼ねることとし、大阪市立大学の木原先生をお招きすることとなった。

テーマは「読解力をつける授業とは」とし、昨年より話題となっている国際学習到達度評価を視野に入れた内容とする。

- ◆日時 8月27日
- ◆場所 野々市町情報交流館
- ◆日程 全体提案・PISAの問題を解く  
分科会 教科から見た読解力  
対談 「教師集団の授業力  
アップ」 木原俊行先生  
中川一史先生

白山支部では、1月からPISAを初めとする学力調査に関心を持って学習していた。OECDの読解力は、自分たちの考える情報教育との共通するものが多いと考えていた。

そこで、実践交流会を白山支部が担当することで、これまでの学習したことを生かす機会となる。それだけでなく、勤務している地域の人を誘うことで、自分たちの情報教育の広がりにもつながると考え、今年度の支部活動の重点とした。

## 映像教育・情報教育・メディア教育の位相

石川県教育工学研究会会長・金沢星稜大学教授 岡部昌樹

1980年代の日本のメディア・情報に関する目的論・能力論に関する実践をレビューすると、映像視聴能力の育成に主眼が置かれている。このことは視聴覚教育、放送教育が情報教育とは異なる文脈で発展を遂げていたことを物語る。

しかし、1990年代以降は急速なデジタル技術の進展により、メディア融合が進み、情報チャンネルが多様化した。特に、1995年以降は、放送と通信分野の融合が進み、インターネットを利用した調べ学習、分散・協調型の学習が盛んに行われるようになった。通信インフラの高度化や動画コンテンツの開発・流通がそれらを“教育の効率化”の側面から支えた。

情報の一元的統合処理（デジタル化）の加速は、結果として情報に占める画像モードの比重を高めていった。

平成10年度の学習指導要領の告示から、はや7年を経たが、高等学校では今年度が完全実施の年度にあたる。そこで、中等前期に焦点をあてて情報教育を振り返ってみる。

- I 期：1980～1985(アルゴリズム)
- II 期：1985～1990(CAI,CAL)
- III 期：1990～1995(アプリケーション)
- IV 期：1995～2000(ネットワーク)
- V 期：2000～(リテラシー)

現在使われている“情報活用の実践力”“情報社会の参加態度”に関する言語情報や認知的技能、認知的方略、運動スキル、態度はICT社会のリテラシーに位置づけられる時代になった。

文部科学省の定義する情報教育の3領域・7視点なるものは、すでにリテラシーレベルでとらえる必要がある。では、今日では運動論的色彩を帯びてきた、メディアリテラシー教育（メディア教育）とは、どのような能力育成をめざしているのだろうか。その切り口として、以下のモデルを提案する(注)。

リテラシー教育は、史的には教養的、機能的、批判的という3つの側面から捉えられてきた。機能的側面は、経済活動との関連が強いことか

ら、これまでも重点が置かれてきた。しかし、近年の欧米での実践は、Critical Thinking がキーワードとなり、“メディアを通して送られてくる情報に対し、批判的に読み解く能力を身に付ける。”といった批判的な側面のみが強調されている。また、複合的概念であるメディアを論ずる場合、種別概念で捉えることは今日では意味をなさない。メディアを解釈する次元を、「一次メディア（記号）」「二次メディア（装置）」「三次メディア（システム）」といった視点概念で捉えることで、はじめてメディアリテラシーの実態をとらえることができる。

注 メディアリテラシーの次元と視点

	I 教養	II 機能	III 批判
A 記号	A-I	A-II	A-III
B 装置	B-I	B-II	B-III
C システム	C-I	C-II	C-III

つまり、A-I（映像教育）、B-II（情報教育）C-III（メディアリテラシー教育）に焦点をあてることで、三者の関係を整理することができる。

映像教育では、記号としての映像に特化したスキルが特性を際立たせているに過ぎないこと。メディアリテラシー教育においては、社会的文脈の次元を若干強調しているに過ぎないことが見えてくる(図表1、2)。

教育は運動論にあまり傾斜すべきではないというのが私の持論である。

## &lt;参考文献&gt;

M.Okabe, "Problem and Issues on the Implementation of Media Education", *Journal of Kanazawa Seiryō University*, Vol.36, No.1, 2002, pp9-18

M.Okabe, "A Practival Research of Screen Education as Cuture Education", *The Japan Association for the Study of Education Media*, No.19, July.9,2005, pp17-22

図1 映像教育の能力育成モデル（Aは映像教育に特化、Cはメディアリテラシーでも重視）

領域	能力	視点	目 標	行 動	
受け手	理解力	論 理	A	・モニタージュの特色が指摘できる。	
		直 観	C	・特定視点から感じ方の違いが言える。	
	洞察力	推 論	A	・シンボルの関係づけができる。	
		視 点	C	・視点移動ができる。	
使い手	探索力	収 集	A	・タイトルから内容が予測できる。	
		選 択	A	・課題解決に必要なシーンを抽出する。	
			A	・多様なメディアからの情報選択できる。	
	発信力	態 様	A	・映像に適切な言語情報を付加する。	
		複 合	A	・シンボルを組み合わせ、映像表現する。	
			A	・モードを異にする情報を映像化できる。	
	作り手	構成力	技 法	C	・技法の組み合わせができる。
			C	・技法を効果的に活用できる。	
立 案		A	・意外性のある構成が提案できる。		
創作力		分 析	A	・態様の異なる情報特性が指摘できる。	
		C	・KJ法的処理で情報を構造化できる。		
創 造	A	・情報関連図を類似的に映像表現する。			

図2 メディアリテラシー教育の能力育成モデル（Cはメディアリテラシー教育の重点目標）

領域	能力	目 標	行 動
受け手	メディアを理解する	A B	・メディアが持つ特性を知る。
		A B	・メディアの持つ技法を知る。
		C	・メディアの影響を知る。
手	メディアを解釈する	A B	・送り手の意図を知る。
		A B	・背景や行間を解釈する。
		A B	・多面的視点で評価する。
手	メディアを批判的に捉える	A B	・客観視することができる。
		A B	・送り手の信条・立場・考え方を知る。
		C	・多角的な視点からクリティカルに読み解ける。
使い手	メディアを使いこなす	A B	・操作技能を身に付ける。
		A B	・複数のメディアを使い分ける。
手	メディアでコミュニケーションする	A B	・複数のメディアを組み合わせ活用できる。
		A B	・送り手の意図は、解釈によって決まることを知る。
		A B	・相手の反応に応じた情報発信ができる。
送り手	メディアで自己表現できる	C	・相手との関係性を深めるコミュニケーションができる。
		A B	・特性を生かし、技法を活用して情報発信できる。
		C	・他者の考えを受け入れつつ、自分の考えが創出する。
		A B	・オリジナルな情報を発信できる。

## 授業改善の工夫

石川県小中学校視聴覚教育研究協議会長・金沢市立夕日寺小学校長 内田 正明

「教育工学」という用語がアメリカから入ってきた時に、「Educational Technology」を「教育工学」と訳したという話を以前に聞きました。その時、「教育技術」あるいは「教授技術」と訳していたらどうなっていたでしょうか。なぜそんな事を書くのかというと、「教育工学」が何かの機器を使った人間味のない教育といったイメージで一般的に受け取られているのではないかと心配するからです。実際はそうではないということを広く、多くの先生方に知ってほしいと思います。3月の教育工学研究大会で会員の先生方の研究発表を聞きました。一言で言うと、授業を創る熱意が伝わってくる多様な実践発表が行われており、大変心強いものを感じました。「新しい時代の授業改善方略」といったネーミングが相応しいと思われる実践ばかりでした。

私は、平成16年度から石川県小中学校視聴覚教育研究協議会長を務めさせていただいています。近年、一部熱心な先生方を除いて視聴覚教育への取り組みが低調で、私自身危機感を持っています。単に視聴覚機器を使う、使わないといった表面上のことを言っているのではなく、より子どもが分かるように、より興味が持てるよ

うに、といった授業改善の動きや意欲が現場から減っているように感じるので。そのことが、心配なのです。視聴覚機器や多様なメディアを使うのも授業を改善したいという願いが背景にあるから効果が上がるのです。

今、各学校は学力向上始めいくつもの課題に学校あげて取り組んでいて、先生方が忙しい事が背景にある事は承知しています。また、パソコンが学校に配備され、それまでの視聴覚機器を古いと言って見捨て、とはいってもパソコンが授業の中で自在に使えるまでにはなっていない現状、そんなことも背景にあるのだらうと思います。そして、「忙しい」と言いながら、結局昔ながらの教科書とチョークと黒板での一斉授業を続けている先生が多いという現状になっているのではないのでしょうか。

困難な状況ではありますが、教育工学の会員の先生方には、日々授業改善の工夫や努力を続けていらっしゃることに敬意を表します。これからは皆様の実践に期待すると共に、その実践が周りの先生方の心を動かし、授業改善の工夫や努力の動きとなって横に横にと広がっていくことを心より願っています。

平成17年度

### 第46回 石川県視聴覚教育研究大会 加賀江沼大会

【期 日】 平成17年11月22日（火）

【会 場】 ☆公開授業 9:40～ ☆分科会 11:10～ ☆全体会 13:30～

山中町立山中小学校 山中町立河南小学校 山中町立菅谷小学校 山中町立山中中学校 石川県立大聖寺高等学校	小学校・中学校 アビオシティホール (加賀温泉駅前) 高等学校 大聖寺高等学校	アビオシティホール (加賀温泉駅前)
---	--	-----------------------

【大会研究主題】

一人ひとりが情報を主体的に活用し、「自ら学ぶ力」をつけるための視聴覚教育の在り方を追求しよう

## 新事務局長になって

石川県教育センター 清水和久

今年度から村井先生の跡を継いで事務局長になりました。まだ、わからないことばかりですがどうぞよろしくお願ひします。ここで私の教育工学研究会との出会いを少し振り返ってみたいと思います。

私がこの教育工学研究会に正式に入会したのは、1993年（平成5年）に金沢大学に内地留学した時です。その内地留学のきっかけは、金沢大学の実践指導センターのコンピューター教育研究会に顔を出すようになってからで、その当時、私は金沢市内の小中併設校に転勤になったところでした。

この学校の職員室に事務用に当時は高値の花だったパソコン（NECのPC9801VX）が置いてありました。いろいろさわっているうちに、自分でも同じようなPCが欲しくなり購入を決意。パソコンについて、わからないことは、パソコン通信のPC-VANのSTSという（全国の先生が集まっていた）シグでいろいろ教えてもらいました。そして、ここでフリーソフトのKiT（加藤護氏制作の教材作成ソフト）に出会い、ネットを通じて大量に教材を集めました。

また、自分でも内地留学中にこのKiTで「武士の時代の始まり」「明治を築いた人々」などの歴史物のソフトをコンピューター教育研究会の助けを借りて2本ほど作り上げました。このソフトを使った実践報告はメディア教育振興会のコンテストでグランプリになりました。

その後は金沢市の教育センター勤務になり、このフリーソフトのKiT教材を、センターの貸し出し用のノートパソコンに入れて現場で大いに実践に使ってもらいました。

現場に戻った後は、インターネットの普及と共に国際交流に興味を持ち、海外の学校と協同でWEBを作成するWEBコンテストに参加し、海外の先生とつながる楽しさを知りました。今

年、県のセンターに変わって、自分では実践ができなくなりましたが、少しでも現場の皆さんの実践に役立てるよう、アンテナを高くして、皆さんに役立つ情報を提供したいと思っています。

さて、ミレニアムプロジェクトの終了年度である今年度、総合的な学習や情報教育にとっては、逆風が吹いているように思います。マスコミでは学力低下が叫ばれ、世間では総合や情報教育よりも教科の基礎基本に関心が行っています。しかし、同じ力量の教師で、ITを活用する教師としない教師では、ITを活用する方の教師の児童の学力が向上したという調査結果をベネッセが出しています。

また、日本教育工学会（赤堀侃司会長）が文部科学省の委託で行った「ITを活用した教科指導の改善のための調査研究」では、ITの使用頻度の高い教員、IT研修を受けた教員、また中堅教員がITの効果をより高く評価しており、ITに慣れ、IT活用の事例を知り、授業に生かせる環境を整備することの必要性が言われています。

今求められているのは、ITを活用すると授業がわかりやすくなり、学力が伸びるといった実証事例と、授業を教育工学的に設計し、評価も含めて系統的に作り出していく会員の皆さんの力だと思います。

各支部では、独自に、パソコンを使った事例集の作成や、読書会、実践報告会が日常的に行なわれています。人を集め、組織していく支部の力が今必要とされています。

教育工学研究の理論面を学び、これからも多くの人に働きかけ、結果を出せる会として、この会を運営していきたいと思っています。是非皆さんのお力添えをお願いします。

## 情報活用能力をのばすリーフレット作り

### — ユネスコ・世界寺子屋運動リーフレット制作を通して —

金沢市立扇台小学校 坂上 則子

#### I はじめに

総合学習は教科の学習を生かして、より主体的な学習活動を行い、生きる力を育てることをめざしたものである。子供たちが、学んだことをもとに、自分の生き方を見つめ直したり、主体的に他へ働きかけていくことができる活動を組むことができるのではないかと考え、D-projectのユネスコ世界寺子屋運動

<http://www.d-project.jp/2005/unesco/index.html>に参加することにした。

#### II 実践の内容

##### 1 きっかけ作り「世界寺子屋運動との出会い」

実践するに当たり、石川県ユネスコ協会の方からベトナムにおける寺子屋作りの実際に関するお話を聞かせていただいた。ベトナムの子どもたちと恵まれた自分たちとの生活を比べ、何か協力できることはないかと子どもたちは真剣に考え始めた。一人一人が行動することは難しいが、みんなで一緒に行動すると、一人よりもダイナミックな活動が展開できそうだ。書き損じハガキを集めるキャンペーンを学年で取り組もうということになった。

##### 2 PCでリーフレット作り

子供たちはまず、1枚の紙に自分が伝えたいことをわかりやすくまとめて表現するためにポスター制作について学習した。ここでは、キャッチコピーの作り方、色使い、構成などについて学んだ。PCで作成することで何度でもやり直しがきく良さや、文字の大きさをすぐ変えられる便利さなども感じていたようだ。日本ユネスコ協会から提供された写真に関してどれを使うと有効かなどお互いに作品を見合う姿も見られた。

##### 3 実践の結果（児童にとっての学び）

###### ① 情報活用能力の育成

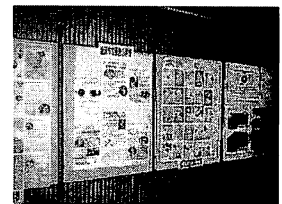
世界寺子屋運動をより多くの人に理解してもらうための効果的なリーフレットの要件やデザインを考え、追及する活動を通して、より分かりやすく印象的に伝える方法を学べた。

###### ② 伝えたいことの明確化

このプロジェクトに参加している他の学校とTV会議リーフレットを見た感想を話し合った。他の作品を見て比べることで自分の作品を客観的にみることができた。そこから、リーフレットをみる対象についても考えを持つことができた。

###### ③ 学習の広がり

子供たちは実際に作成したリーフレットを手に地域に出かけ呼びかけた。呼びかけに応じてくださりたくさん書き損じハガキが集まった



ことで、子供たちは活動の手応えを感じるとともに、ボランティア活動に対する関心も高めていった。これからも続けたいとか他の活動にも協力したいという感想がでてきた。

#### III まとめ

今回のプロジェクトではユネスコ・世界寺子屋運動への支援を通して出会った人やものと関わりを持つ中で、情報教育、国際理解、平和教育、人権教育などについて広い学びができた。総合的な学習の時間がめざす、自ら学び自ら考える力などをつけるために大変有効であったと考える。また、実際にユネスコ協会で自分たちの作ったリーフレットが使われたり、県のユネスコ協会で表彰されるなど子供たちにとってはやりがいのあるものとなった。

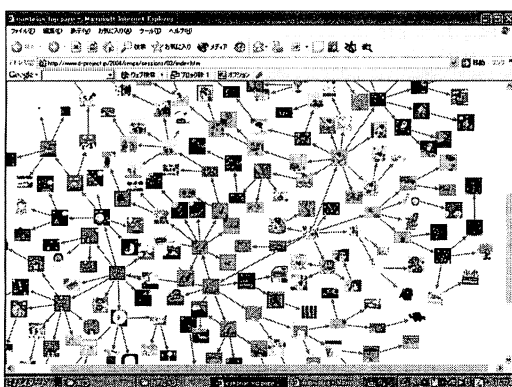


## D-project 学校連画：絵のリレー

金沢市立浅野川小学校 細川 都司恵

### 1. はじめに

『連画』とは、「種絵」や「自分が気に入った絵」からイメージの種をもらい、コンピュータの機能を生かして思いのままに発想・表現し、それを Web 上で交流校の子どもたちと絵のリレーとしてつなげていく表現活動である。（詳しくは、D-project サイト参照）



### 2 昨年度の取り組み

#### (1) セッションのねらい

「学校連画；絵のリレー」で、「教師がどのような指導と評価を行なえばよいか」を明らかにしたいと、意図的に初心者・経験者グループに分けてセッションを実施した。

#### (2) セッションの結果

初心者グループでは、システムのおもしろさに刺激を受け、どんどん送信することを楽しんで様子が見られた。しかし、経験者グループでは、種絵を一度自分の中に取り込み、その良さをどのように表現に生かすか考えてつないでいくという感じが感じられるセッションとなった。

### 3 Cグループの一員としての実践

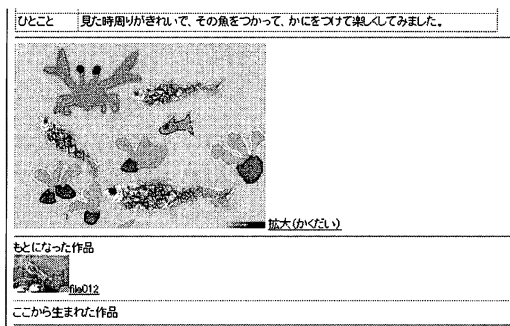
連画を通して色々な発想のよさに気づき、

「鑑賞の力」を育てる（図工科の鑑賞の第5学年および第6学年の目標(3) 作品などを進んで鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、感性を高めるとともに、それらを大切にするようにする。）ことをねらいにして実践することにした。

#### (1) 実践1「鑑賞の回数をふやす」

連画の優位性は、多くの絵に出合えることである。そこで、鑑賞の場を多く持つことで、作品の意図やそのよさ・美しさを感じ取れるように活動を進めた。いろいろな学校の人のいろいろな発想を知ることができ、参考になったという感想が多かった。

#### (2) 実践2「相手のよさや連画の意図を伝える」



「もともになる絵」を大切にできる意識を持たせたいと考え、連画したい絵を一度印刷して、どうつなげるかを構想させ、ひとこと欄に「もともになる絵」のよさやその絵を自分の絵にどう生かしたかを書くようにした。子どもたちは、ひとこと欄と絵を結び付けて鑑賞・表現し合うことで、視覚的なコミュニケーションを図ることができたのではないかと考える。

\*今年度も3つのセッションが行われます。





## D-project 小学校版 動画制作ワークショップ

### 1 はじめに

2002年から金沢大学の中川一史先生を中心にデジタル表現研究会（D-project）が立ち上がっている。情報教育を実践する教員への啓発・普及に役立つコミュニティが構築され、様々なプロジェクトが動いている。その中で、授業をデザインすることを目的とした教員向けワークショップが全国的な展開として行われてきた。

一方、コンピュータの性能や動画編集用のソフトウェアの操作性は格段に向上し、価格も手ごろになっている。手軽に動画編集ができる時代、子どもも自身が動画編集をすることで様々な力をつけることができるであろう。

そこで2004年からパソコンによる動画編集のワークショップがスタートした。

### 2 ワークショップのねらい

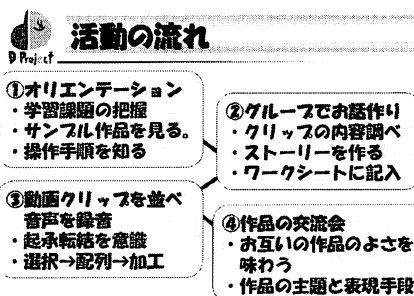
ビデオ作品を作ろうとする場合（例えば学級のニュース番組やビデオレター等）、発信したい内容をはっきりさせ、シナリオを書き、絵コンテを描き、撮影してからようやく編集作業に入る。しかし動画編集を経験したことがない者にとって、それはあまりにも敷居が高い。

そこで、素材やサンプル作品、作業の流れや操作マニュアルを用意し、ワークシートを用いながら、実際の授業のイメージをもってもらうワークショップとした。受講者自らが子どもの立場になって作品を作り、子どものつまずきや指導のポイントなどを体感しながら、授業への活かし方を考えてもらうことがワークショップの大きなねらいである。

### 3 ワークショップの内容

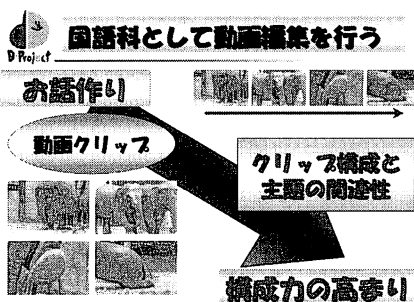
さて内容であるが、慶應義塾中高等部田邊則彦先生が作成したゾウの動画クリップ11本をもとに、30秒程度のショートストーリーをつくるという活動を考えた。小学校の教員向けとして行うものである。活動の流れは以下のようにした。

これは2004年7月に内灘町立大根布小学校山



下雅美学級での実践が元になっている。6年生の児童は意欲的に取り組み、児童による動画編集の可能性を確認した。

### 4 動画編集でつきたい力



国語科の中で行う活動として考えると、主題に合わせてクリップを効果的に構成する力が上げられる。またセリフを言うときの音声での表現力やグループでの話し合い活動でコミュニケーションの力も鍛えられる。

また映像を解釈したり、作り手側の体験をすることで、映像を批判的に見たり、普段から映像を意識的かつ能動的に見る態度が養われる。その他に、動画編集の手順を理解したりソフトウェアの操作に慣れることで、次に番組作りなどをするときスムーズに活動が展開できる。そして映像に慣れ親しんでいるはずの子どもたちの「映像を見る目」を向上させることに非常に有効であると考えている。

何より楽しい授業になることは間違いない。

# デジタルで楽しい授業（デジ楽）プロジェクト

## 1. デジ楽プロジェクトとは

「デジタルで楽しい授業プロジェクト」通称「デジ楽」（でじたの）は、2003年度より取り組まれている、デジタルコンテンツ利用の楽しくわかりやすい授業の促進をねらったプロジェクトです。三重県教育委員会研修主事の中村武弘先生を主査に、文部科学省生涯学習政策局平成15年度教育用コンテンツ活用高度化採択事業として全国の教員が参加しています。

わが石川県教育工学研究会からも、顧問として村井万寿夫先生、コアスタッフとして中條敏江先生、渡辺直人先生、中野淳子先生、正来、授業プラン作成スタッフとして白山支部のメンバーを中心に多数参加しています。

## 2. デジタルコンテンツ利用授業を広める

すでによく知られているように、デジタルコンテンツとはコンピュータなどのデジタル機器で再生、活用できるように表現された静止画像、動画、文章、音楽などの情報のことです。NHK教育テレビの番組サイト「学校放送オンライン」やIPAの「教育用画像素材集」など様々な企業、研究期間などが教育の情報化に向けた様々なコンテンツを開発・蓄積・公開しています。

これらは政府計画による「全ての教室がインターネットでつながる」目標に対応したものであり、授業で活用できる教材提供サイトが着々と整備されているわけです。

「デジ楽」はそれらの動きに呼応し、デジタルコンテンツが実際にどのような形で授業に利用されればよいか、それがどのような子どもの学びにつながるかを追究するプロジェクトです。具体的な成果物としては、

○100事例以上の各教科各学年にわたる「デジ

タルコンテンツ」利用授業案の作成と公開

- デジタルコンテンツ活用授業のコツなど、活用場面や配慮点の具体的事例の例示・公開
- 授業実践者へのヘルプデスクの提供などがあります。

すぐに使える授業事例がわかりやすく公開されているサイトとしてぜひ下記サイトをご覧ください。ただければと思います。

デジタルコンテンツで楽しい授業作り研究会（通称「デジ楽」）

<http://d-tano.axisz.jp/main/index.htm>



デジ楽サイトのトップページ

## 3. デジタルコンテンツは授業の「スパイス」

デジタルコンテンツ利用授業について議論を深める機会をいただいて、これは授業設計を議論することそのものであると感じました。

デジタルコンテンツは授業をわかりやすくするスパイス、使いすぎは逆効果、ねらいと効果を見極めて必要な場面でちょっと使う…という「コツ」は教育工学の本質に忠実な知見であると感じました。

## 図書館と連携した情報教育

白山市立東明小学校 中條敏江

### 1. 図書館教育とメディア系情報教育

図書館教育というと読書指導を思い浮かべる人が多い。そして実際、読書指導に偏りがちな現実がある。しかし、図書館教育は大きく分けて、「読書指導」と「利用指導」の二つの指導とそれを支える図書館運営がある。この「利用指導」は、図書館の使い方だけと考えがちだが、図鑑指導など狭義の利用指導と、発展させた調べ活動の両方を含む。

「もくじ」から情報を見つけることを学ぶ図鑑指導などは、情報を大きな概念から次第に小さな概念へと導いて探していく学習活動を行うことによって、知りたい情報を全体像から見る能力を高めることをねらいとしている。そしてこれは、ダイレクトに知りたい情報に辿り着くインターネット検索ではなかなか身につかないことである。

また、情報教育を、図書やパソコンなどメディアを活用する指導ではなく、文字や画像などを読み解く力としての視点で考えると、いわゆる情報教育と図書館教育は重なる面が多い。実態を調べてみると、情報教育と図書館教育の年間計画は、著作権などの指導項目は重なる場合が多い。

これらのことから、図書館教育と連携して行う情報教育の必要性が求められ、情報主任、司書教諭、学校司書の三者を含む研究会を行っている。

### 2. 現実的なカリキュラム

情報教育や図書館教育の指導内容は、国語科や社会科など各教科に埋め込まれている。そのため、指導時間指導内容が明確でなく、学校や学級間で差が大きい。

そこで、数年前より、どんな学校でも実施可能なような、実施時間数や指導項目を明らかにした実現可能なカリキュラムを作成した。

さらに、研究メンバーだけでなく、関心のある学校や地域の学校でも、改善しながら学校にあった形でカリキュラムを作成し運用している。

### 3. 実践パッケージ

情報教育や図書館教育の主体は、各教科の指導者であり学級担任である。しかしながら、経験の少ない指導者にとっては、授業のイメージが持ちにくく、準備も不慣れである。特に、学校の全指導者がカリキュラムを実践するには、指導イメージや準備などの支援が必要である。



昨年度、情報担当・図書館担当としてどのような支援が必要であるかをしらべたところ、授業イメージを持てるシナリオ、ワークシート、資料準備、司書などの人的支援であった。

今年度は、前述のカリキュラムをさらに10実践ピックアップして、その支援をパッケージ化することで、松下教育研究助成を受けた。昨年度の支援を、パッケージとするには、資料準備は準備の画像、司書の説明には説明動画を入れることとした。

さらに、関心のある指導者に活用してもらうことで、パッケージを改善したり、有用性を検証したりしてみたいと考えている。

### 4. 広げる活動

図書館と連携した情報教育を進めるためには、具体的な授業イメージを提示することが効果的だと考えた。授業の様子を伝えるだけでなく、実際に学習会などの参加者と演習を行った。ここ数年、メンバーが県内外で取り組みを広げる活動を行うことができたのが有り難い。

## 英語の必要感とIT活用能力の向上をねらえる 定形型国際交流プロジェクト

### はじめに

小学校でも英語活動を取り入れるところが多くなっており、学校に外国の方を招いての国際交流も行われるようになってきている。しかしこの場合の交流は、必然的に日本の子どもと外国の大人との交流になってしまう。そこで、同世代同志の交流を目的として、国際交流を扱うプロジェクト「Global School Project」をデジタル表現研究会（D-project）の中に立ち上げた。

これは、小学校での英語活動を活用し、IT活用能力を生かして国際交流を行おうというものである。海外の相手校を見つける手段としてはGVC（Global Virtual Classroom=web作成コンテスト）に参加することとした。

### 1) GVC とは？

国が違う学校3校で1チームを作り、テーマを決め半年間でWEBページを作成するコンテストである。以下スケジュール

- 9月 GVCに申し込みパートナー校を見つける
- 10月 英語での自己紹介カード、ビデオの交換
- 11月 テーマの決定・メール交換
- 1月 webの作成・クリスマスカード交換
- 2月 高校との連携で翻訳作業
- 3月 webページ完成

### 2) 参加校のメリット

- ・交流を求めている先生が申し込んでくるので意識が高く、必ず相手を見つけることができる。
- ・web作成というゴールが決まっているため交流が中途半端に終わってしまうことがなく作品完成の達成感を味わうことができる。
- ・掲示板などの交流のツールが用意されているので、連絡を密に取ることができる。
- ・Webのテーマは、自分たちで決められるので、自校の総合学習のテーマを使うことも可能。
- ・英語の必要性を感じる事ができる。

### 3) Global School Projectの意義

GVCでの交流校の国は、いろいろであるが、英語でのコミュニケーションや進め方には共通

のノウハウがあるはずである。そこでGVCに参加している国内の学校同志での情報の交換をするために作ったのがこのGlobal School Projectである。国内の交流校同志で、自分たちの地域紹介を見合い、アドバイスをもらい、よりよいものにしたり、高校との連携で、児童が作った日本語のページを英訳してもらったりすることができた。

### 4) 昨年度の成果

昨年度は、GVCに日本からは6校が参加、そのうち4校がこのGlobal School Projectからの参加であった。各校は、互いに連絡を取り合い、コンテンツをブラッシュアップする中でWebを完成することができた。私が実践した大徳小学校は小学校の部で3位にはいることができた。その時のテーマは「平和と平等の島」を作り上げようというもので、理想とする島のイメージをお互いに出し合い、話し合いながら島を作っていた。カナダからは理想の島にも軍隊が必要であるという意見が出され、「誰とでも仲良く」という平和を考えていた日本の子どもたちは、その考え方の違いに驚いていた。このような考え方の違いを直接学べる点が、国際交流の醍醐味であった。今年度も9月から始めるので興味のある方は是非いっしょにやってみませんか？

### ↓ GVC 世界第3位授賞の新聞記事



第6回  
センターセミナー  
in 野々市

金沢大学教育学部  
附属教育実践総合センター  
2005年8月27日

# 読解力をつける 授業力とは

日時

2005年8月27日(土)13:00~17:00(受付 12:30)

会場

野々市町情報交流館『カメリア』2階・ホール椿

(野々市町役場に併設 <http://www.e-camellia.jp/camellia/index.html>)

プログラム 1

全体会① 提案

13:00~13:45

- 主催者・共催者あいさつ
- 全体提案① 中條敏江(白山市立東明小学校)  
いま、求められる『読解力』への取り組み
- 全体提案② 正来 洋(金沢市立額小学校)  
OECD(経済協力開発機構)の学力調査問題を解いてみよう!

プログラム 2

グループセッション

13:55~15:50

- 各教科・総合グループ提案者からPR
- 教科・総合別分科会
  - ▶(提案者から)具体的な取り組み・問題点について
  - ▶グループセッション
  - ▶各グループからの発表・質疑(木原俊行(大阪市立大学)中川一史(金沢大学教育学部))

国語1

提案:山下 雅美(内灘・西荒屋小)  
司会:坂上 則子(金沢・扇台小)

国語2

提案:中野 淳子(附属幼稚園)  
司会:岩崎 京子(七尾・徳田小)

社会科

提案:白江 勉(砺波・砺波東部小)  
司会:山本 洋(金沢・浅野川小)

算数

提案:渡辺 直人(白山・東明小)  
司会:村本邦子(野々市・野々市小)

理科

提案:河村 真吾(金沢・米丸小)  
司会:加藤 隆弘(金沢大学)

総合

提案:細川都司(金沢・浅野川小)  
司会:飯田 淳一(金沢・大徳小)

プログラム 3

全体会② 対談・まとめ

16:00~17:00

教師集団の授業力アップをめざして~読解力・情報活用能力を育む~

対談: 木原俊行(大阪市立大学) 中川一史(金沢大学教育実践総合センター)

主催

金沢大学教育学部附属教育実践総合センター  
情報教育セミナー実行委員会(石川県教育工学研究会)

共催

野々市町教育委員会

後援

石川県教育委員会

問い合わせ先: 金沢大学教育学部附属教育実践総合センター (TEL: 076-264-5588)

# 平成17年度 石川県教育工学研究会役員名簿

(順不同 敬称略)

【会 長】 岡部 昌樹 (金沢星稜大)

【副 会 長】 内田 正明 (夕日寺小) 中川 一史 (金沢大)

【代 表 理 事】 西出 隆 中村 孝雄 紙谷 威  
山本 昌猷 清丸 亮一 谷内 敏夫  
藤井 昭久 北本 正明

【理 事】 〔◎は常任理事〕

(加賀地区) ◎荒谷 実 (加賀市教委) ◎吉田 博 (中海小) 下出 貴 (串小)  
菖蒲田英夫 (宮竹小)  
(金沢地区) ◎三田村英明 (富陽小) ◎西田 政人 (菅原小) 宇都宮 博 (錦城養護)  
南 千之 (鳴和中) 尾小山輝子 (盲学校) 山崎 副 (小坂小)  
加藤 隆弘 (金沢大) 村井万寿夫 (新神田小) 山本 秀紀 (大徳中)  
(能登地区) 坂井 善久 (石崎小) ◎笹田 光春 (高階小) ◎大森 俊彦 (天神山小)  
◎今寺 研治 (上野台中) 荒巻 雅博 (徳田小)

【運 営 委 員】 〔○は研究委員〕

(加賀地区) 谷口 一登 (串小) ○大桑 晴雄 (光野中) 井表 照雄 (美川小)  
渡辺 直人 (東明小) 畠山 久雄 (錦城養護) ○守田 健雄 (翠星高)  
山崎 治 (館野小)  
(金 沢) ○奥野 豊夫 (三谷小) ○坂上 則子 (扇台小) ○中島 満子 (三馬小)  
○青江 弘義 (浅野川小) 升田 敦士 (北鳴中) 坂井 直澄 (泉中)  
浜坂 昌明 (小将町中) 羽場 政彦 (金沢市教委) 山本 英喜 (北鳴中)  
端崎 圭一 (金大附属中) 宮中 和久 (金沢伏見高) ○樫田 豪利 (金大附属高)  
畠 一馬 (金沢辰巳丘高) 島崎 徹 (二水高)  
(能登地区) ○山下 雅美 (西荒屋小) ○中西 英一 (富永小) 笹川 修栄 (鳥屋小)  
前 正人 (鹿島中) ○岩崎 京子 (徳田小) 松本 豊 (東湊小)  
山下 匡 (大屋小)

【事 務 局 長】 清水 和久 (県教育セ)

【事 務 局 次 長】 嶋 耕二 (組織担当: 西南部中) 飯田 淳一 (企画担当: 大徳小)  
細川都司恵 (会報担当: 浅野川小) 正来 洋 (Web 担当: 額小)

【研 究 部 長】 中條 敏江 (東明小)

【研 究 副 部 長】 飯田 淳一 (兼務: 大徳小) 山下 雅美 (西荒屋小)

【会 計】 事務局次長兼務 (補) 村井美智子 (金沢大)

【会 計 監 査】 米田 茂 (野田中) 堀内 克之 (西南部小)

【日本教育工学協会役員】

(大学理事) 吉田 貞介  
(研究会理事) 岡部 昌樹

【顧 問】 伊東 平俊 柳田 勇 山崎 豊 吉田 貞介

【指 導 委 員】 太田 雅夫 小笠原喜康 金子 劭榮 黒上 晴夫 黒田 卓 坂元 昂  
堀田 龍也 大野木裕明 水越 敏行 山西 潤一 山極 隆 吉崎 静夫  
赤堀 侃司 鈴木 克明 清水 康敬 堀口 秀嗣

# 石川県教育工学研究会 会計報告

## 平成16年度決算

### 収入

科目	予算	決算	備考
会員負担金	426,000	341,000	3,000×113名、1日会員等
県補助金	420,000	420,000	
賛助会費	210,000	180,000	60,000×1社、30,000×4社
雑収入	420	634	銀行利息
合計	1,056,420	941,634	

### 支出

科目	予算	決算	備考
賃金	60,000	60,000	事務局事務費
謝金	80,000	80,000	講演会謝金(旅費、宿泊費、講師代)
旅費	240,000	210,000	全国大会(沖縄大会)派遣旅費
消耗品費	52,000	41,475	発送用封筒、タックシール等
印刷費	326,000	299,250	会報(No.67, No.68)、会員名簿、研究紀要印刷代
図書費	140,420	140,420	日本教育工学協会会費、送金手数料、支部活動費、研究図書費等
事務連絡費	0	0	
通信運搬費	128,000	96,239	会報・会員名簿・研究紀要等の郵送代
借上費	30,000	14,250	会場借上代
合計	1,056,420	941,634	

## 平成17年度予算

### 収入

科目	予算	備考
会員負担金	420,000	3,000×140名
県補助金	400,000	
賛助会費	180,000	30,000×6社
雑収入	0	
合計	1,000,000	

### 支出

科目	予算	備考
賃金	60,000	事務局事務費
謝金	60,000	研究発表会講師・座長等謝金
旅費	210,000	全国大会派遣旅費
消耗品費	70,000	発送用封筒代、タックシール代等
印刷費	320,000	会報(No.69, No.70)・会員名簿・研究紀要印刷代
図書費	140,000	教育工学協会会費、支部活動費
事務連絡費	0	
通信運搬費	95,000	会報・会員名簿・研究紀要郵送代
借上費	45,000	会場借上代
合計	1,000,000	

## 平成17年度 石川県教育工学研究会事業計画

事 業	期 日	概 要
1 総 会 理 事 会	17年 5月 29日	○平成17年度総会（於：金沢市教育プラザ富樫） ・平成16年度事業報告・決算報告 ・平成17年度事業計画・予算案
	18年 3月 5日	○平成17年度理事会（於：金沢大学） ・平成17年度事業報告・決算中間報告 ・平成18年度事業計画・予算案 ・平成18年度役員案
2 研 究 事 業	17年 5月 29日	○教育討論会 「総合学習はどうなるか、どうあるべきか」 会場：金沢市教育プラザ富樫
	17年 8月 20日	○夏季セミナー「コンピュータ教育利用夏季研修会」 「小中学校でのコンピュータの活用方法を考える」 会場：石川県教育センター
	17年 8月 27日	○夏の研究会「実践授業研究会Ⅰ」 「読解力を付ける授業力とは」 会場：野々市交遊舎
	17年11月11・12日	○第31回全日本教育工学研究協議会全国大会 会場：長野県
	17年11月26日	○秋の研究会「実践授業研究会Ⅱ」 「(仮題)メディア活用について」 会場：七尾地区
	17年 1月 21日	○冬の研究会「実践授業研究会Ⅲ」 「(仮題) IT を使った授業力向上をめざして」 会場：金沢地区
	17年 2月	○第27回北陸三県教育工学研究大会福井大会 会場：富山大学
	17年 3月 6日	○平成17年度石川県教育工学研究大会 会場：金沢大学
3 刊 行 事 業	4月、6月、8月、 10月、12月、3月	○研究会ニュース 年間を通じ当会 Web サイト <a href="http://web2.incl.jp/kogaku/">http://web2.incl.jp/kogaku/</a> にてニュースを掲載しています。
	8月	○会員名簿（200部）
	8月、3月	○会報（69号、70号、B5版、24頁、200部）
	3月	○第31号研究紀要（B5版、58頁、200部）

### 編 集 後 記

たくさんの方のお世話をいただき、会報を完成できたこと、心より感謝いたします。

会報作成を通して、以前からご活躍されている方と、改めて交流の機会をいただいたと同時に、新しい方の新鮮な実践にふれることもでき、昨年の成果と今年度の展望を考えることができました。

毎年開催している実践交流会も、足を伸ばし、七尾で開催が予定されております。新旧問わずお集まりいただければ幸いです。

【会報担当】

### 会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入をお願いいたします。 年額 3,000円

平成17年 8月20日発行

発行者	石川県教育工学研究会
代表者	岡部昌樹
事務局	〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学教育学部附属 教育実践総合センター内
印刷所	TEL 264-5588 FAX 264-5589 ㈱小林太一印刷所 TEL 238-5454 FAX 238-5453